

その瞑想を追い始める

——ヘンリー・ヴォーン小考

(二)

森田 孟

ヘンリー・ヴォーン (Henry Vaughan, 1621-95) がその生涯の大半を過した生れ故郷の〈自然〉は、この詩人の感性と思想をどのように培い彼の作品に如何なる働きを及ぼしたであろうか。森と滝を詠った作品がある。

森 The Timber

確かにそなたは一度は繁茂した！ そして多くの〈春〉が多量の明るい朝が 多量の露が 幾たびもの驟雨が
そなたの頭上を越した、多くの軽やかな〈心〉と〈翼〉が
今は死んでいるもの、そなたの生き生きとした木陰に憩
った。

そしてやはり新たな後継者が 歌い廻り回っている、
瑞々しい〈木立〉が育っており その緑の枝々が伸びてい
る

昔から今尚持続している空へ向かって、
その間 丈低き〈スミレ〉が木立の根元に生い茂っている。

しかしそなたは 悲しく重々しい死〈線〉の下で
あらゆる無意味で冷たく暗いものを浪費する、
そこでは光の夢さえ輝きそうにないし
緑を思わせるものは何も 葉や樹皮さえ無さそうだ。

それでも（まるで何か深い憎悪と反対が

そなたが強風と己との間で生長していくうちに生れて

今尚 消えないかのように）そなたは暴風雨を憤って

未だやっても来ないのにどのくらい近付いているかを感じ

取る。

さもなければ そなたはすっかり安らいでいるので、嵐の

激しい息遣いも もはやそなたの安息は乱せない、

だから このそなたの、死後の奇妙な憤激は、

そなたの平和を（生前に）破った者にだけ向けられる。

だから殺された人は、美しい人生が終り

血が凍りつくと、静かな（中心）に保存するのだ

或る密かな感覚を、それが 肉体を殺すことに

なつた死んだ血液を 彼が近付くと流動させるのだ。

それで存在することになるのか 罪より悪い殺人者が？

はたまた淫らな生活より忌まわしい暴風雨が？

あるいは（過去の罪と争っている時には どのような

〈感情変形素〉が真物の悔恨より一層強く内部で働くのだ

ろうか？

人生の儂い喜びや無益な気遣いを棄て去り

地上に引き留められたくないと真底思う者は

多くの住まいのある一軒の家を得たのであり、

己が魂を永遠の浮き立つ楽しみの中に保てるのだ。

しかし こうして世間に対しては死んで罪から

免れても、彼は狭い自分だけの道を歩くのだ、

それでも 悲嘆と古傷のせいで彼は甚だ不機嫌になり

その生涯は 雨降りの泣きの涙の日となるのだ。

というのも 彼は世間を見放して 単なる

余所者として生きて、死んで久しい人々同様になる筈だっ

たが

それでも喜びは喜びとしてあるので、健全な魂にとつては

自分が長らく虚しい生活をする事になると考えるのは悲

しかろう。

しかし陰が光を引き立てるように、涙と悲嘆は

(自ずから悲しい泣きながらの物語ではあるが)
その罪を重大だと示すことで安堵の思いを
それだけ遙かに大きくして 吾が〈救い主〉の栄光を語る
のだ。

もし吾が道が 焦熱で〈土地〉の全てが呪われている
砂漠と未開の森を貫いているのなら

その方がました、溜り水は雨で流れ出して洪水となり
吾が瓶を満たすことになり、私が渴き死ぬことはないだろ
うから。⁽³⁾

聖なる驟雨なのだ そういふのは、そして上から送られて
きた流れが

その流れ着く筈の所に〈篤信の処女たち〉⁽⁴⁾を生み出す、
それに生命の木々は 他の水では愛せない⁽⁵⁾、
こういう上方の泉でなければ生命の木々は育めないのだ。

しかしこうした清らかな源泉が流れ出すのは我らが死んで
からだ、

些かの雫はその前にも滴るかも知れないが、澄んだ泉と

絶えざる流出は 我らがその流れの路に泥を投げ込んで
立ち去るまでは 空高く保たれ続けるだろう。

「ローマ人への手紙」第六章第七節
死んだ者は 罪から解放されている。

訳注

- (1) resentful. (= That which causes a change of feeling
「感情の変化をもたらすもの」)。OEDがこの箇處を引用
[F・二九〇]。
- (2) 「ヨハネによる福音書」14・2。「私の父の家には住まい
が沢山ある」。「同」。
- (3) イシユマエルとハガルの物語を参照するよう示唆、「創
世記」21・9〜21。「M・七四八、F・二九〇」。
- (4) Virgins. 「探求」"The Search" 170. の "Faire, virgin-
flowers" 「美しい処女の花々」参照「M・七四八」。
- (5) 「ヨハネの黙示録」22・1〜2。生命の木は生命の水の
川のどちら側にも生長した「F・二九一」。

最初の二連は、枯れても嵐の接近に反応し続ける森とい
う奇想に富む観念「P・八七」に続いてゆく具体描写には

相違ない。気高い木の倒れたことを嘆き、その健在時の生命と現在の衰弱とを感情を込めて比較している「H・一七五」が、この詩の中心は、ペテットの言うとおりの、禁欲主義の実践、罪、改悛を扱っていて、最後に挙げられているテキストの「死者は罪から免れる」に対する瞑想を展開するのである「P・八七」。次の作品はどうだろうか。

滝 The Water-fall

時が静かに密かに過ぎてゆく中 何たる深い眩きを洩らしながら

そなたの透き通った冷たい豊富な水は

ここに流れ落ち、音高く

荒れ狂い呼びかけることか、

まるであの方のゆったり淀みなき（お供の一行）が留まりぐずぐずしながら この険しい場所を恐れているみたい、

この広く知れ渡った山径は

玻璃のように澄み切っていて

誰もが皆 下ってゆかねばならぬ

終りへ向かってではなく、

この深い岩だらけの墓所に急かされて昇ってゆく もっと明るくきらびやかな更に長い進路へ。

懐かしい流れ！ 懐かしい堤よ、そこにしばしば

留まっては 私は憂いに沈んだ眼を染ませてきた、

そなたの生き生き動く溜りに溜った一滴一滴が

元の流れ出した源へと奔り込んでゆくことから、

哀れな魂とは言え どうして陰や夜を恐れていいものか

光の海から（確かに）やって来たのだから。

あるいは誰も備えていない者のないあの雫が

全てそなたに確かに送り返されてくるのだから

どうして脆い肉体がこれ以上疑っていいものか

〈神〉が召し上げるものをあの方が取り戻さないのでは

などと？

おお 役立つ紛れなき〈元素〉よ！

この地上での吾が聖なる洗淨の器、

私を初めてあの命の泉に

委ねたもうた方よ、〈小羊〉はいずこへ行くのか？

何たる崇高な真理が 健全な主題が

そなたの神秘に富む深い流れの中に宿っていることか！

鈍い人には決して見い出せないものだ
もしも初めにそなたの顔の上を

覆っていたあの〈霊〉が彼の心を導いて

活気づける愛で全てを孵化しなかったなら。

この高鳴る小川は絶えず落下して

流れる環となりながらあらゆるものを淀ませ、⁽⁵⁾

進み続けて堤へと辿り着き それからもう見えなく

なるが、それと同じように人々も通り過ぎてゆく。

おお 吾が目に見えぬ資産にして

吾が栄光の自由は 今尚、遅れている!⁽⁶⁾

そなたは吾が魂が捜し求める〈水路〉であり、

これには〈瀑布〉や〈河口〉は伴わないのだ。

〔M・五三七—三八〕

訳注

(1) a sea of light 錬金術の概念〔F・三四三〕。

(2) 洗礼の際の〔F・三四四〕。

(3) 「ヨハネの黙示録」7・17。「小羊は……彼らを命の水の源へ導き賜うだろう」〔同〕。

(4) 「創世記」1・2。「神の霊が水の面を覆っていた」。世界を「孵化する」という観念は、錬金術についての書物に

現れるもの〔同〕。

(5) stagnate. (= become or remain stagnant). OEDがこの箇處を引用〔同〕。

(6) 「ローマ人への手紙」8・21。「何故なら被造物自身にも

滅びの縄目から解放されて神の子たちの栄光の自由に入る

望みが残されているからである」〔M・七五一、F・三四四〕。

冒頭の十二行は、美しい音の効果〔P・一八二〕、頭韻の美事さ〔H・一六一〕、言語を情緒豊かに使用した好例〔B・S・一五〇〕、自然描写の美しさ〔L・一八六〕と、特に讚美されているが、二三行目の「役立つ〈元素〉」の「役立つ」は、「宇宙の過程で水が果す役割を錬金術では特別に強調していることを示す」〔P・七四〕のであり、水にも宇宙での物理的な激動と洗礼に使われる精神の発展での力〔P・七五〕の両面に眼が行き届いて、先刻の作品「森」の森が単なる森でなかったように、この作品の滝水も、水であって水の上に留まらない。〈自然〉は象徴的なやり方で、類推と実証のために役立たされるのである〔P・九六〕。

基本において、新プラトン主義的〈溢出〉原理に根ざす思想を表明した「すばらしい詩の一節」として、川崎寿彦

がこの詩の一五―一八行を引用して、「目の前をたえまなく流れる急流の水をじっと見つめて、そこに神の力と、摺理の顕現を、直接に、肉体のしびれのように感じるといふ、なにかホプキンスと似た感じの瞑想から生れた詩」〔川崎 1・一八一〕という整然たる、誠に整然たる名評を残したことは忘れられない。

《自然》が余りにも単なる自然に留まっていけない、というより更に一層巨大な《自然》に膨らんでいるのがヴォーンの自然であるが、故郷の景色とバイブルのそれらが重なっているとペテットの観る「P・三三」作品に、「虹」がある。

虹 The Rain-bow

未だ若くて素晴らしい！ しかし未だ見えているものを
我らは軽んずる 瑞々しく新しくても古くて汚れているの
だ。

何とはつらつとしていたことか そなたは、セムの賞讃に
充ちた眼が

そなたの磨き出された炎立つ《弧》を初めて認めた時！

テラ、ナホル、ハラン、アブラム、ロト⁽²⁾といった
若々しい世界の白髪の父たちが一塊になって

熱心な表情で毎時間 そなたの新たな光を

見詰めんものと 驟雨のたびに震えていた時！

そなたが輝く時 闇も白く美しく見え、

嵐は《音楽》になり、雲は微笑む空気になる、

雨はやさしく己が蜜の雫をかけて 裂けた大地に⁽³⁾

芳香を浴びせ、乳を草や花々に振り注ぐ。

平和と《日光》の輝かしい誓約だ！ そなたの《主》の

手の確かな絆、その方の目の対象だ⁽⁴⁾。

そなたに目を凝らすと、私の光は霞んでいて

遠く弱いとは言え そなたの光の中に彼の人を見ることが

出来る、

榮光に満ちた王座からそなたを見話めて

《全て》と《一なるもの》⁽⁵⁾との間の《契約》に留意する彼

のお方を。

おお 汚れた偽りの者どもよ！ 吾が《神》は守りたもう

のだ

それでも御自らの約束を、ところが我らは己が約束を破つ

て眠りにつく。

〔墮罪〕以降、最初の罪は〔血〕の中にあつたし⁽⁶⁾

〔酩酊〕は素早く、正に洪水のあとに続いた、

しかし〔救世主〕^{キリスト}が亡くなられて以来（まるで我ら自身が企てたみたいだ、彼の御方もまた〔樂園〕^{パラダイス}を失うようにと）

これら二つの大罪を、我らは一つに合わせて犯している、尤も血と酩酊は、大時化^{しけ}を揺れながら進むだけだ⁽⁸⁾。

〔水〕は（尤も〔天国〕の窓々と大海が

丸々四十日間沈んでいた世界の上に確かに涙を流したが）我らを改心させられなかったし、血は（恨んで）

そう〔神〕御自らの血は、我らは踏みにじって軽んずる始末。

それであの邪悪な娘⁽⁹⁾たちは、ソドムが未だ燻っている間〔神〕に火から救い出されたのに、父親と寝たのだ。

だから平和な合図となる虹よ、そなたは目に見えぬ矢を全て隠したまま、まだ雲の中に留まっているが

私はそなたの上に〔彗星〕の上にと同じように見るのだ〔彗星〕を、悲しい世界の不吉な書物を。

そなたの光を、悲しみに沈み⁽¹⁰⁾、苦惱で汚れていると

私は判断する、懲罰の炎がびっしり混ざり合っているの。というのも考える人がいるからだ、そなたが輝いているのは大胆な

嵐を制止するため、ただ雨に付き添っているだけだと、それでも私は承知している、そのように我らの罪が要求しているのだ

そなたは冷たい雨を唯〔誘っている〕だけなのだ、〔雨〕が〔火〕に変わるまで。〔M・五〇九―一〇〕

訳注

(1) ノアの三人の息子のうちの長男。「創世記」9・18
〔M・七四九〕。

(2) テラ七十歳の子が、ナホル、ハラン、アブラム（アブラハムの元の名）。アブラハムの甥でハランの息子がロト、その妻はソドム滅亡の際に一族がその地から逃げる途中振り返って地の塩にされた。「創世記」11・24〜27〔F・三〇六〕。

(3) G・ハーバートの「摂理」"Providence"の二一七〜八行目「雨よ、我が花々を傷つけることなく、優しくかけたたまえ／君の蜜の雫を」と比較せよ〔M・七四九〕。

(4) 「創世記」9・16、とだけヴォーン自身の注がある。そ

の箇処、「虹が雲の中に現れる時、私はこれを見て、神が地上にある全ての肉なるあらゆる生き物との間に立てた永遠の契約を思いおこすであろう」。神の述べる言葉。

(5) 「創世記」9・16 [M・七四九]。
(6) カインがアベルを殺したこと。「創世記」4・8 [F・三〇七]。

(7) ノアの。「創世記」9・21 [同]。

(8) “make but foul, foul weather.” 海事表現。船が暴風雨の中を酷く揺れながら進むイメージ。

(9) ロトの二人の娘たち。「創世記」19・30〜36。「F・三〇七」。自分たちの許に男の来る状態でないので、父によって子を産せようと、父のロトに酒を吞ませて父と寝床を共にし、アンモン人の先祖となり、モアブ人の先祖となる子をそれぞれが産んだ。

(10) Ictnal (= mournful, sorrowful). ヴォーンがこの語をこの意味で使っていると、OEDがこの箇処を引用してある [F・三〇七]。

愈々バイブルが背後に、いや表面にもびっしり張り付いている感じの『火花散る燧石』*Silex Scintillans* (1650, 1655) の本領發揮という作品である。

虹と言えばどうしても、虹を見て心が躍らなくなったら

死んだ方が増しだと詠ったワーズワスに思いが動く。そこで次に、彼の「『靈魂不滅の』啓示頌」との類似が云々され続けた「後退」(本誌前号で拙訳した)と同様に、幼児期の回想が描かれる作品をみてみたい。次の「墮落」であるが、この作品はその訳注にも示したように「宗教」との比較が必要な詩のようである。以下にその二篇を続けて並べてみよう。

墮落 Corruption

確かに、そうだった。(人間) はあの初めの日々には

全てが石だったわけではなく、(土) でもなかった、

彼は些かは輝いていたので、あのか弱い(光線) によって

己が誕生を幾らかは垣間見た。

彼は頭上に(天国) を見て、そこから自分は

ここへ(罪ありとされて) やって来たのだと知った、

そして最初の(愛) がこの上なく強く引き付けたので、そ

れ以後

彼の心は確かにそちらへ進み寄ったのだ。

ここでの事情は彼には馴染みがなかった、(甘ったるくて)

それに全てが茨になったり雑草になったりするまでは
それらは長持ちせず（彼自身同様）静かに死んでいた

彼らが実際に〈種子を撒く〉や否や

彼らは彼と口論するようにみえた、彼を滅ぼした

あの〈行為〉は 彼ら皆を打ち負したのだから、

彼はこの世に〈呪い〉を引き寄せたし、〈砕いた〉のだ

己が墜落でその骨組をすっかり。

このため彼は家庭を待ち望むようになった、不平分子や

敵たちと一緒に留まっているのは嫌になるように、

彼は〈エデンの園〉を恋い焦がれてはしばしば言った

ああ！ 何と輝かしい日々だったことか、あの当時

は？ と。

〈天国〉も彼には冷たくはなかった、どの一日も

あの谷や、あの〈山〉は

訪れることが出来たし、まだ〈樂園〉^{パラダイス}は在ったのだ

どこかの緑の陰や、泉の中に。⁽¹⁾

天使たちはここでは〈使節〉⁽²⁾だった、〈どの茂み〉も〈庵

も

〈どの檜の木〉も本街道も 彼らを知っていた、

野原を唯歩いたり、どこかの井戸端に座っていたので

彼には確かに彼らを見る事が出来たのだ。

全能の〈愛〉よ！ そなたは今いずこ？ 狂人は

座り込み、凍りつき、

彼はわめき立てて、火を掻き立てたり煽ったりしないと誓

い、

糸には紡がれよと命ずる。

私には分る、そなたの〈幕〉^{カーテン}は〈はっきり引かれる〉の

だと、そなたの虹は

〈雲〉の中で余りにも幽かにみえる、

罪はやはり勝利を取めるし、人間は沈んでしまうのだ

〈中心〉の下に、自らの経帷子の下に、

全ては深い眠りの中にあり 夜だ、濃い闇が降りてきて

そなたの身内の上で孵化する、

しかし聴きたまえ！ あれが何を吹き鳴らしているのか、

〈天使〉が叫んでいることを

起きなさい！ 汝の鎌を投げ入れよ。⁽³⁾ [M・四四〇]

訳注

(1) こと次の数行を「宗教」「Religion」の初めの五連と比較してみよ「F・一九七」。「宗教」及び次のトマス・ヴ

オーン「ヘンリーの双生児の弟」の文章 (Thomas Vaughan, *Magia Adamica*, 1650, p.17) と比べてみよ。「彼は榮光に満ちた〈樂園〉から締め出されて卑しい世界に閉じ込められたが、その病める汚染した〈基本元素〉が彼自身の〈本性〉と密かに共謀して助け合ってあの〈死〉を早めたのであり、それが既に彼の〈肉体〉の中で支配力を揮い始めた。天国は彼を、〈大地〉を、そして彼の周囲に居る大地の生み出した〈世代〉を悼んだ。彼は自らを〈凶悪犯〉、〈殺人者〉と看做し、あの、自らの転落のせいでの世界に引き続いている〈呪い〉と〈墮落〉の責めを負っているのだ…」〔M・七三七〕。

(2) *Leiger*: "representative, agent, or ambassador" 「代表者、代理人、使節」の意〔F・八三〕。

(3) 「ヨハネの黙示録」14・14〜19。〔M・七三七、F・一九七〕。鋭い鎌を手にして現れた御使いに別の御使いが、その鎌を地に投げ入れよと大声で叫んで、実った穀物と葡萄を刈り取らせた。

宗教 Religion

吾が〈神〉よ、私がああ森の中を歩いていて
木々の葉を御身の霊が相変らず煽っている時、

私には陰の各々に見えるのです 〈天使〉が
一人の人と語り合いながら大きくなってゆくのが。

〈レダマの木〉⁽¹⁾の下には 或る家が

あるいは冷たい 〈ミルトスの木〉⁽²⁾の天蓋が

他のものは〈榿〉の緑の大枝の下に⁽³⁾

あるいは或る泉の泡立っている〈眼〉⁽⁴⁾の所に、

ここでヤコブは夢を見て、格闘する⁽⁵⁾、そこで

エリヤは一羽の〈カラス〉によって食事を与えられ

別の時にはあの〈天使〉によって、そこでは

その天使が彼にパンと一緒に水をもってきてくれる⁽⁶⁾、

アブラハムの〈天幕〉では 翼を持つ客人たちが⁽⁷⁾

(おお その時天国は何と馴染み深いものだったこと
か！)

食べて、飲んで、語り合い、座って、憩ったのだった
〈冷たい〉陰濃き 〈夕暮〉になるまで、

いや 御身 御身その人、吾が〈神〉は火の中に

へつむじ風に煽ら⁽⁸⁾れ、**雲**に乗っていて、その優し

い声は

そこでたつぷり語りかけるので、私は讀えるのです

我らにはこのような日々、何も〈話し合うこと〉がな

いのを、

休戦は破られたのか？ それとも我らには

今、御身との調停者がいるので

御身はそれ故、古い〈協約〉を揺すって

彼からの数々の訴えかけて決定を下されるのか？

あるいはそうなのか、幾人かの緑の頭が今や

奇跡は皆終らねばならぬと言うので？

御身は約束したのだが、持ちこたえる筈だと

〈教会〉の諸々のしるしと平和は、と、

否、否、^{いな}〈宗教〉は〈泉〉なのであり、

どこか密かな所から、金〈鉞〉に

引き出されて生れてくるのであり、そしてそこから

一滴一滴もたらされるのだ、強壯剤が、〈葡萄酒〉が、

しかし、泉は長く隠れて〈進み〉

〈大地〉の暗い水路を通り抜けて

より良いからより悪いへと静かに育ってゆき、

その味わいと色は共に汚れ、

それから抉り続けながら増してゆくのだ

〈反響〉もどきと、〈混ざり合った〉音とを

そして知らず識らずしばしば擱んで

しまうのだ、地下の〈硫黄〉鉞脈を、

それで毒に汚染されて或る〈土地〉で噴き出し

一目で多くを楽しませるが

酔ってしまい、水溜りか唯のへどろとなり

〈体格「地勢」〉にならずに病気になる、

正にそのような汚染した下水溝を我らは得るのだ

あの〈サマリア人〉の死んだ〈井戸〉⁽⁹⁾のようなのを、

我らはその〈核〉を渴望してもならないのだ

大方の声は貝殻のようなものだから。

癒して下さい だからこういう水を、主よ、さも無くばお
連れ下さい 御身の羊の群を

この水は飲めないのですから 清水を噴き出す岩へと、
見下げて下さい 祝宴の目立つ〈主人〉を、おほ 輝いて
もう一度変えて下さい 我らの〈水〉を〈葡萄酒〉に！

「雅歌」第四章十二節⁽¹⁰⁾

我が妹、我が花嫁は 〈囲われた〉園、閉じられた〈泉〉、
封じられた噴泉のようだ。 「M・四〇四―五」

訳注

- (1) 「列王紀上」19・4～5。エリヤがレタマの木の所で眠
っていた時、主の使いが彼に触れて言った。「起きて食べ
なさい」と。「F・一四八」。
- (2) 「ゼカリア書」1・11。「ミルトスの木々の下に立って
いた主の使いが…」。「同」。
- (3) 「士師記」6・11。「主の使いがやってきて檜「テレビ
シ」の木の下に座った」。「同」。
- (4) 「創世記」16・7。主の使いが泉の傍らにいるハガルを
見つけた。「同」。この第二連はG・ハーバートの「腐朽」

「Deqar」の六～七行「人は御身を探して見出ししたかも知
れぬ ほどなく／＼どこかの美しい檜の木の下に許か繁みか洞窟
か井戸に」と比較せよ「M・七三〇」。

(5) 「創世記」28・11～12、32・24～30。各々、天使たちが
登り降りしている梯子をヤコブが幻で見て神と格闘する話
が語られる「F・一四九」。

(6) 「列王紀上」17・6。エリヤに食物を運んでくれるカラ
スの話。同じく19・5～8では、天使がエリヤに「熾火で
焼いたパンと一瓶の水」を与えている「同」。

(7) 「創世記」18・1～8。主は三人の男の姿でアブラハム
の所に現れ、天幕の入口に座って彼と飲食を共にした。ソ
ドムに「夕暮に」ロトの許にやって来た二人の天使は
〔創世記〕19・1。その日早くアブラハムの所にいたあの
天使たちのうちの二人だったであろう「同」。

(8) ヘンリー・ヴォーンは、神が語りかける多くの章句――
火の中から〔出エジプト記〕3・2～6、「レビ記」9・
24、「申命記」4・12、5・4、雲の中から〔出エジ
ト記〕24・16、「民数記」11・25、火と雲の中から〔申
命記〕5・22。静かな小聲で〔列王紀上〕19・12。つむ
じ風の中から〔ヨブ記〕38・1、40・6。――を凝縮し
ているのである「同」。

(9) 「ヨハネによる福音書」4・6～14。サマリアの女にイ
エスが与えた生命の水に較べて、ヤコブの井戸の水は死ん

でいた「F・一五〇」。

(10) ジュネーブ版の「雅歌」4・12(同)。

この二作品の比較考究は、先刻の「虹」の読解同様、稿を改めたい。

『火花散る燧石』の諸作が、如何なる配置になつてゐるか。その構成状態の詳細はいずれ検討する予定であるが、手始めに、本誌前号に示した「後退」の前後の作品を眺めてみたい。直前の「霊の己惚れ」は、その訳注からも察せられるように、優れた錬金術・神秘学の学者だった双生児の弟トマス¹の著書の影響がみられ、先刻の「滝」ではないが、語り手の「私」は早朝外出して泉に出くわし、〈自然〉に向かつて呼びかけながら「開眼」を希つてゐる。

直後の作品は、若死にした別の弟を悼む詩で、弟に早く先立たれて、この地上で自分はどうしたらいいかと慨嘆しながら気を取り直そうとしている。幼児期の無垢を希求し憧憬する作品は、二人の弟に関わる詩で前後を挟まれていることになる。その二篇を続けてみてみよう。

霊の口徳と Vanity of Spirit

すっかり物思いに耽つた拳句 私は吾が〈庵〉を後にして
一休みした

そこでは音高く吹き出す泉が夜明けに調べを合わせていた。
私はここで長らく請ひ願ひ、知りたくて呻き声を挙げた
誰があゝの〈雲〉にあれ程見事な虹をかけたのか
誰が天球を曲げて 墮落しながら

この壮麗なる〈環¹〉を巡らしたのか

その人の名は何とこのか、どうすれば私に
その人の偉大な光の一部でも見出し出せるのかと。

私は自然に呼びかけた、それで彼女の貯えの全てを貰いて
これまで誰も触れたことのなかつた幾つもの封を破つて²

彼女の子宮、彼女の胸、彼女の頭が

(そこには彼女のあらゆる秘密が根付いていて
私が隅なく捜したが) 〈生きとし生けるもの〉

全てを通り抜けて ようやく現れ出て

私の自我を探し求めてくれたので そこに私は見出し
たのだ、

見慣れぬ跡や聞き慣れぬ音を。

ここにこの力強い泉の湧く所から 私は幾筋か小さな流れ

を見つけた、

永遠なる丘陵から〈木霊^{こだま}〉を響かせくるのだ、

弱い光線と火が閃めいて私の目を射た、

年若い〈東〉か 〈月の輝く〉夜のように、⁽³⁾

それが片隅にいた私を頭に示したのだ 甚だ古色

蒼然たる記念品の陰に引っ込んでいたのだが

象形文字はすっかりばらばらにされ

殆ど思い出せない壊れた文字で書かれていた。⁽⁴⁾

私はそれらを集めて(とても嬉しくて)その断片を

結合しようとした、その神秘を見い出せる

だろうと思つて、しかしそれが ほぼ終ると

私に射していたあのささやかな光は消え去っていて

私は悲嘆にくれた。ようやくにして私は言った、

こういうヴェールに包まれていては、私の〈掩蔽された

眼〉は

そなたには近づけそうにないのだから(だって夜中に

誰が光と交際できようか?)

私は覆いを剥いで たった半分の視力を

買い取るためでも 喜々として死ぬだろうと。

[M・四一八―一九]

訳注

(1) 本稿最後の「世界」の注(1)参照。

(2) 双生児の弟トマスの著「大地を覆う天空」*Celum Terrae*, 1650, p.53. の「〈自然〉は売春を嘆いていると思う、私が

彼女の封を殆ど破って彼女を世間に裸で晒してその威蔽を

傷つけようとしているので:」を参照[M・七三三]。

(3) 同じく弟の「光より出づる光」*Lumen de Lumine*, 1651, p.3. の「私は白い弱い、〈光〉を見い出せた。(ロウソク)

のほど澄んでいなくてぼんやりしており〈大気〉に大層似

ていた。その書き手は〈月〉の〈山々〉に〈自然〉によつ

て案内されて出かけたが、その衣服は〈東〉のような匂い

がした」を参照「同」。

(4) 「聖イヒティッド」(St. Ilytd)なる名称の古いクロムレッ

ク「環状列石」巨石を用いた古墳、記念碑」が、ヴォーン

の住んだニュートンの近くの丘の上にあった。それは三箇

の直立した石にもう一箇傾いた石を屋根根にしており、粗末

な十字架と柵と、「象形文字群」から成っていた「H・二

四」。

さあ、さあ、私は「こ」でどうすればいい?

Come, come, what do I here?⁽¹⁾

さあ、さあ、私はここでどうすればいい？

彼が去ってしまったので⁽²⁾

どの一日も十年になり

どの一時間も、一年になった、

さあ、さあ！

総量を切り離そう

この汚れた涙によって！

(それが真実だと

御身だけが知っている)

毎日毎日が私の不安の種なのだ。

2

そよぐ風とてなく

通りすぎる光もない、

狭い通路だけは、と私は思う(遠くではあるが)

御身の手は真近だ、

さあ、さあ！

この唇を打って黙らせたまえ、

この安らぐことなき呼吸は

御身の名を汚して

おどおどしたりは決してしない

死に到るまで。

3

おそらく考える人もいるだろう 墓を

蓄えのある家ではなく

もはや決して生むことなき

暗く閉ざされた子宮なのだ。

さあ、さあ！

そんな風に考えると麻痺してしまう、

だが 私は彼と共にいて

彼のために涙を流し

寝台で眠って

御身の中で目覚めたい。

[M・四二〇]

訳注

(1) 標題ではなく、この詩の第一行。本篇のように標題がなく、「||」なる段落符合だけで示される作品は、『火花散る燧石』全二九篇のうちに十篇ある。

(2) おそらく弟ウィリアムの、一六四八年七月の死「F・一七〇」、『M・四二五、七三三』。一六五〇年刊行の『火花散る燧石』所収の、標題なしでこのような段落符合のみの作品九篇中、少なくとも五篇はこの弟への哀悼歌である

*

本稿は最後に、今更の感無きにしもあらずながら、ヴ
オーンの作品のみならず英詩の名作の中でも最も有名な詩
に属する一篇を訳出しておきたい。この詩人の世界に分け
入るには欠かせないのでから。

世界 The World

私は先夜〈永遠〉を見た

純粹で果てなき光の大きな〈環〉⁽¹⁾のようだった、

全く穏やかだった、明るい時同様

そしてその下を巡って、〈時〉は刻々、日々、年々

惑星によって駆り立てられて

広大な影のように動いていたが、その〈中に〉世界と

そのお供の一行が放り出されていた、

愛に溺れる〈恋人〉は この上なく風変りな調子で⁽²⁾

彼らへの〈不満〉を述べていた、

彼の近くには、彼の〈リユート〉、彼の空想と彼の飛躍、

機智の辛辣な喜びが

手袋と結び目共々楽しみ愚かな罫

ながら彼の貴重な〈宝〉があり

これら全てが散らばっていた、その間彼は眼を注いでいた

一本の花に。

2

陰鬱な〈政治家〉⁽³⁾は 重圧と苦悩に取りつかれていた

真夜中の濃霧がそこをゆっくり動いているように

それで彼は留まりもせず先へも行かなかった、

咎めようという考えが(悲しい〈掩蔽〉のように)彼の

魂に仏頂面をみせ、

外側で泣きながら証言する〈雲〉が

一声叫びながら彼を追跡した。

それでもその〈土竜〉は掘り進み、己が進路が見つからな

いようにと

土の下で精を出して

目指す獲物を(鷲掴みに)したが、人には見えたのだ⁽⁴⁾

あの政策が、

教会と祭壇が彼を養ったのであり、〈偽証〉は

ブユと蠅であった、

雨が彼の周りに血となり涙となって降ったが、彼は

それを呑み込んだ 無償ででもあるみたいに。

3

守銭奴は 鏽の山で脅えながら

そこに人生の全てをピンで留めていて、埃にまみれた

自らの手を殆ど信頼しなかった、

それなのに一品たりと高い所に置こうとせず、盗人共を

恐れながら生活する。

何千人も彼と同じような狂乱した人はいて

各々が金を抱き締めていた、

紛れもない〈快樂主義者〉は天国を感覚で捉えて

見せかけを軽蔑したが

他方そうでない人々は広範な〈過剰〉へと滑り落ちて

それなりの事を少なからず言った、

弱者の類いは軽んじるし、つまらぬ製品は〈虜にする〉

自らを輝いていると思っている人々を、

そして劣った蔑まれる眞実は〈数に入る〉⁽⁵⁾のだ

そういう人々の勝利によって。

4

それでも この間もずっと、実は泣いて歌って

歌って泣きながら舞い上がって〈環〉⁽⁶⁾の中に入り込む者も

いたが

大抵は翼を全く使おうとはしなかった。

おお 愚か者共（と私は言った）、こうして暗い夜の方を

眞実の光より先に選んで

洞窟や洞穴^{ほら}で生きて、昼日中を憎むなんて、

何しろそれは道を示してくれるのに、

その道は この死んだ暗い住処から

〈神〉へと導いてくれるのだ、

道なのだよ、君が〈太陽〉を踏みつけても

太陽よりもっと明るくなるような。

しかし私が彼らの狂っている有様をこのように論じた時

人はこう囁いた、

この〈環〉を〈花婿〉は 誰の為にも提供しなかった

己が花嫁の為以外には。

「ヨハネの第一の手紙」第二章第十六・十七節⁽⁸⁾

全て世にあるもの、肉の欲、〈目〉の欲、そして生活の

誇りは、父から出たものではなく、世から出たものである。

そして世は過ぎ去り、世の欲もまたそうだが、〈神〉の

御旨を行う者は永遠にながらえる。 「M・四六六―六七」

訳注

- (1) 「霊の己惚れ」“Vanity of Spirit” [M・四一八—一九]の六行目「墮落しながら」の壮麗なる〈環〉を」参照 [F・二三一]。他にも、「復活前主日」“Palm-Sunday” [M・五〇—二]の二三行目「明るい環の中で」だけでなく、最初の詩集「一六四六」所収の「星の夜に歩くアモレットに」“To Amoret, Walking in a Starry Evening” [M・七]の七行目「広大な〈環〉」でも、「環」は馴染みの心象 [P・五]。
- (2) G・ハーバートの「無気力」“Dullness” 五行目「我儘な恋人は奇妙な調べで…」参照 [M・七四二]。
- (3) オリヴァー・クロムウェル (Oliver Cromwell, 1599-1658) を指すと考える向きもあるが、それは単なる推測にすぎない [F・二三一]。この詩が出版された一六五〇年にはクロムウェルはまだ十分な権力は得ていない。彼の世界に明白になっている政策が「土の下で精を出す」土竜が掘り進むのに似ているとも、彼の良心が自責の念で苦しんでいたとも私は思わない [H・二二一]。
- (4) G・ハーバートの「告白」“Confession” の一四—一五行目「我らの中の土竜が、土を持ち上げ捜し回るように／そして目指す獲物を爪で鷲掴みにするまで」を参照 [M・七四二]。
- (5) G・ハーバートの「教会の闘士」“The Church Militant”

の一九〇行目「その間〈真理〉が傍らに居て、自らの勝利を数えていた」を参照 [同]。

- (6) *The Hermetica, Libellus I, 26a* (ed. Scott, I, 129) は述べる。七つの階層を通り過ぎて昇ってゆくことで世界を逃れて第八の階層へ到り着いた者たちは、「第八階層の実体の上」の「神へと入ってゆく前に「父を讃えて」歌を歌うが、その第八の階層でも歌は歌われている」と。歌を歌い且つ泣くという観念に賛成してヴォーンは、こういう錬金術の魂を「大勢の群像」(ヨハネの黙示録) 7・9) と同一視したのかも知れない。その群像は「大きな苦難を通ってやってきた」(同・7・14) のであり、彼らの眼から「神は涙を悉く拭い去って下さるだろう」(同、7・17、21・4) し、新しいエルサレムの住民と共に「夫のために着飾った花嫁のように用意を整えた」(同、21・2) ののである [F・二三一—二三三]。
- (7) 「変人」“The Queer” [M・五三九] の三行目「花嫁の環のよう」参照 [M・七四三]。ここにも「環」が出てくる。
- (8) 欽定訳版とは少しだけ異なる [F・二三三]。

作品の真中に、神に選ばれていない人々の中でもこの世で慢心している者の種々の型——「愛に溺れる恋人」、守銭奴、享楽家、そして最も強力な「陰鬱な政治家」——を

象徴性豊かに粗描した主要部を持つ詩「P・一九三」、確認から諷刺を経て最後の混合に到る構造が見事に作用している詩「ME・一九四」、栄光のうちに始まり罪深い地上に落下し、最後にもう一度栄光へ昇る詩「ME・一一〇」である「世界」(「この世、現世」)の読解も稿を改めたい。

本稿は、ヴォーンの、燧石から飛び散る火花の八片を選び出し、邦訳によってその外側の姿そのものだけを、おぼろげながら開示しようと試みた。思われるかも知れないほど、恣意による無作為の作品選出ではないつもりである。ヴォーンの世界の考察には、次回以降もう少し火花を集めてからにしたい。先刻の詩「森」に言及しながらベセルは、樹木の生命に融け込めるような発端部の構想力が後半部での「倫理への応用」によって弱められるのがこの詩人の「いつもの欠点」だと評した(BS・一五二)が、その「倫理への応用」こそヴォーンの面目であり特色でもあるので、その有様をもっとよく知るためにも。

***参照文献** 本稿で直接言及したものについては文中では各文献の上に記した略記号で示す。数字はそのページ表示。

[A] Austin, Frances. *The Language of the Metaphysical*

Poets. London: The Macmillan Press, 1992.

[B] Beer, Patricia. *An Introduction to the Metaphysical Poets*. London: The Macmillan Press, 1972.

[B-E] Blunden, Edmund. *On the Poems of Henry Vaughan: Characteristics and Intimations*. London: Cobden Sanderson, 1927; rpt. New York, 1969.

[B-E-i] Blunden, Edmund. *Lectures in English Literature*. Tokyo: Kodokan, 1952, 2nd ed.

[B-H] Bloom, Harold, ed. *John Donne and the Seventeenth-Century Metaphysical Poets*. New York, New Haven, Philadelphia: Chelsea House Publishers, 1986.

[B・a] Bradbury, Malcolm and David Palmer, eds. *Metaphysical Poetry* (Stratford-upon-Avon Studies 11) London: Edward Arnold, 1970.

[B-s] Bethell, S. L. *The Cultural Revolution of the Seventeenth Century*. London: Dennis Dobson, 1951.

[C] Chambers, E. K., ed. *The Poems of Henry Vaughan, Silurist*. Introduction by H. C. Beeching. 2 vols. London and New York: Charles Scribner's & Sons, 1896.

[D] Durr, R. A. *On the Mystical Poetry of Henry Vaughan*.

- Cambridge, Massachusetts : Harvard University Press, 1962.
- [㉑] Empson, William. *Seven Types of Ambiguity*. London : Chatto and Windus, 1930 ; Penguin Books, 1961. 174-75.
[岩崎宗治訳 『曖昧の七つの型』 (絶学社 一九七四) 三二二-三二五]°
- [㉒] Fogle, French, ed. *The Complete Poetry of Henry Vaughan*. New York : Doubleday, 1964 ; New York University Press, 1965.
- [㉓] Friedenreich, Kenneth. *Henry Vaughan*. Boston : Twayne Publishers, 1978.
- [㉔] Gardner, Helen, ed. *The Metaphysical Poets*. London : Oxford University Press, 1961.
- [㉕] Garner, Ross. *Henry Vaughan : Experience and the Tradition*. Chicago : University of Chicago Press, 1959.
- [㉖] Hutchinson, F. E. *Henry Vaughan : A Life and Interpretation*. Oxford : Clarendon Press, 1947.
- [㉗] Holmes, Elizabeth. *Aspects of Elizabethan Imagery*. Oxford : Basil Blackwell, 1929.
- [㉘] Holmes, Elizabeth. *Henry Vaughan and the Hermetic Philosophy*. Oxford ; rpt. New York : Haskell House, 1966.
- [㉙] Hammond, Gerald, ed. *The Metaphysical Poets : A Casebook*. London and Basingstoke : The Macmillan Press, 1974.
- [㉚] Leishman, J.B. *The Metaphysical Poets : Donne, Herbert, Vaughan, Traherne*. Oxford : Clarendon Press, 1934.
- [㉛] Lyte, H. F., ed. *The Sacred Poems And Private Ejaculations of Henry Vaughan*. Boston : Little, Brown and Company, 1865.
- [㉜] Martin, L. C., ed. *The Works of Henry Vaughan*. Oxford : Clarendon Press, 2nd ed. 1957.
- [㉝] Martin, L. C., ed. *Henry Vaughan : Poetry and Selected Prose*. London : Oxford University Press, 1963.
- [㉞] Miner, Earl. *The Metaphysical Mode from Donne to Cowley*. Princeton : Princeton University Press, 1969.
- [㉟] Martz, Louis L. *The Paradise Within : Studies in Vaughan, Traherne, and Milton*. New Haven and London : Yale University Press, 1964.
- [㊱] Martz, Louis L. *The Poem of Mind : Essays on Po-*

- ety/English and American*. New York: Oxford University Press, 1966.
- [11] Retter, E. C. *Of Paradise and Light: A Study of Vaughan's "Silex Scintillans"*. Cambridge: Cambridge University Press, 1960.
- [12] Richmond, H. M. *Renaissance Landscapes: English Lyrics in a European Tradition*. The Hague: Mouton, 1973.
- [13] Simmonds, James D. *Masques of God: Form and Theme in the Poetry of Henry Vaughan*. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1972.
- [14] Schuchard, Ronald, ed. *The Varieties of Metaphysical Poetry By T. S. Eliot/The Clark Lectures at Trinity College, Cambridge, 1926 and/The Turnbull Lectures at The Hopkins University, 1933*. London: Faber and Faber, 1993. 「ロナルド・シユハード編注『T・S・エリオットクラーク講演』村田俊一訳(松柏社 二〇〇一)」。
- [15・16] Spencer, Theodore, and Mark Van Doren. *Studies in Metaphysical Poetry: Two Essays and A Bibliography*. Port Washington, N. Y.: Kennikat Press, 1939.
- [17] Tuve, Rosemond. *Elizabethan and Metaphysical Imagery*. The University of Chicago Press: 1947; rpt. Phoenix Books, 1961.
- [18] Whittier, John Greenleaf. *Anti-Slavery Poems: Songs of Labor and Reform*. London: Macmillan and Co., 1889.
- [19] Williamson, George. *The Donne Tradition: A Study in English Poetry from Donne to the Death of Cowley*. New York: The Noonday Press Inc., 1958. 1 st ed. 1930.
- [20] White, Helen C. *The Metaphysical Poets: A Study in Religious Experience*. New York, 1936; rpt. New York: Collier Books, 1966.
- [川崎1] 「コンリー・ヴォーンの自然神秘主義」(川崎寿彦「薔薇を以て語らしめよ―空間表象の文学」名古屋大学出版会、一九九一。一七四―一九八)。
- [川崎2] 川崎寿彦「鏡のミニエリスムールネッサンス想像力の側面」研究社、一九七八。一五二―一五八。
- 拙訳の〈〉付きと「チェック体」は、原詩ではそれぞれ大文字で始められる語句とイタリック体部分である。